

St. Luke's International University Repository

Learning Through Reconstructing of Nursing Interaction on Clinical Practice for Terminal Care.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 射場, 典子, 酒井, 禎子, 外崎, 明子, 池谷, 桂子, 小松, 浩子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/410

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ターミナルケア実習における 「看護場面の再構成」による学生の学びの分析

射場 典子¹⁾ 酒井 禎子²⁾ 外崎 明子¹⁾
池谷 桂子²⁾ 小松 浩子³⁾

要約

4年生に行われている総合実習の1つであるターミナルケア実習では、「看護場面の再構成」を実習記録やカンファレンスに取り入れている。実習に「看護場面の再構成」を用いることによる学生の学びを明らかにするために、「看護場面の再構成」の実習記録、それをもとにしたカンファレンスで話し合われた内容、学生に行ったアンケート、さらに教員から見た学生の学びの観点から分析した。

今回、学生が取り上げた場面数は36場面、患者との関わりの場面が29場面、家族との関わりの場面が6場面、家族とナースの関わりをその場で観察した場面が1場面あった。1人の学生につき、1～5場面が取り上げられていた。

カンファレンスで話し合われた内容、アンケートの結果、および教員の評価を分析してみると、ターミナルケア実習において「看護場面の再構成」を用いることは学習過程を促進する1つの有効な方法であると評価された。すなわち、学生はその場面の分析と課題を考察し、困難を感じている問題を他者と共有しあうプロセスを通して、1)ターミナルステージにある患者・家族の理解とよりよいケアのあり方についての学びを深め、2)自分の心の動きやコミュニケーションの傾向と問題点に気づくなど自分自身を見直す機会を得て、看護者としての自己の理解を深め、3)取り上げた場面について意見交換を行うことでチームアプローチを学ぶことができていたと考察された。また、このような学習のプロセスは、学生の看護観や死生観を深めることにつながっていた。一方で、「看護場面の再構成」は、自己を見つめる機会として、アイデンティティを脅かす可能性もありうるため、十分なサポート体制を整えた上で、学生が安心して共有できるようなグループダイナミクスに配慮していくことが重要である。

今後は、継続的に学生の学びや変化についての評価を行いながら、より有効な指導方法について検討を行っていきたい。

キーワード

ターミナルケア、実習、看護場面の再構成、看護学生、患者－看護婦関係

I. はじめに

本学では総合実習の1つの選択肢としてターミナルケア実習を開講している。総合実習は、4年次に開講され、援助論Ⅳ、臨地実習の上に積み上げられるレベル3の実習科目である。総合実習の共通の目標とターミナルケア実習の目標は表1、2の通りである。この実習では学生

たちが死を免れ得ない患者やその家族との直接の出会いを通して、生と死に真向かい、自らの死生観や看護観を育てていくことをめざしている。死に対峙しつつ、生を全うしようとしている患者やその家族のケアは、その人を理解することを抜きには考えられない。これまでの人生をどのように過ごされ、現在どのような苦痛を体験し、最期のときをどのように過ごそうとしているかを踏まえてケアにあたることが重要である。しかし、多くの学生にとって死については、これまでの講義や演習の中で理解を深めつつあるものの、看取りの体験はほとんどなく、実習の中でそのような人々をどのように理解し、

- 1) 聖路加看護大学 講師 (成人看護学)
- 2) 聖路加看護大学 助手 (成人看護学)
- 3) 聖路加看護大学 教授 (成人看護学)

表1 総合実習の目標

- 関心のある看護領域において、対象と環境との相互作用を力動的に把握し、対象の最適健康状態を生み出すことができるよう、メンバーの一員として主体的に自らの役割と機能を発揮し、働きかける能力を養う。
- 看護実践を通して、看護の専門性について考え、自らの看護に対する看護観を深める。

表2 ターミナルケア実習の実習目標・具体的目標

実習目標

近い将来、死を免れない患者とその家族に対して、人間としての尊厳を保ちつつ、その人にとって生と死が有意義なものとなるように援助できる。

具体的目標

1. ターミナルステージにある人の全人的苦痛 (Total Pain) を身体的、心理的、社会的、霊的側面から理解する。
2. ターミナルステージにある人の家族の悲嘆やおかれている状況を理解する。
3. ターミナルステージにある人とその家族の Quality of Life が高められるように援助を行う。
4. ターミナルステージにある人とその家族の Quality of Life を高めるために行われるチームアプローチを理解し、チームの一員として主体的に援助を行う。
5. ターミナルステージにある人とその家族との関わりを通して、生と死について自らの考えを深める。

表3 受け持ち患者の概要

	性別	年齢	診断名	ADLの状況
1	女	63	左乳癌術後、肺癌、骨・脳転移	全介助
2	男	84	食道癌術後、下部喉頭癌、脳転移	全介助
3	女	68	多発性骨髄腫	全介助
4	女	55	子宮頸部癌術後、癌性腹膜炎、骨盤内再発	部分介助
5	女	78	大腸癌・十二指腸癌術後、盲腸癌、肝転移	全介助
6	女	79	悪性リンパ腫、肝硬変	全介助
7	女	83	右肺腺癌、骨・肝・脳転移	全介助
8	男	68	多発性脳転移 (原発不明)	全介助
9	男	69	S状結腸癌術後、肝臓癌、肺癌	自立
10	男	67	肝細胞癌	全介助
11	女	74	右乳癌術後、骨転移	部分介助
12	女	57	左肺癌術後、脳・骨・右腎転移	全介助

表4 学生が記述した看護場面の再構成のテーマ

- 意識レベルが低下した患者を介護する家族への援助の難しさ
- 死への不安や機能低下から抑うつ傾向にある患者への対応の難しさ
- さまざまな思いを抱えた家族間の調整の困難さ
- 告知を受けていない患者への戸惑い
- 患者と自分との話の行き違い
- 患者との生と死に関する会話
- 自分の気持ちを伝えることの難しさ
- 患者・家族の言動の意味に気づくことの難しさ
- 患者と医療者との病気の認識のずれ
- せん妄状態にある患者への対応の難しさ
- 苦痛を表出する患者への対応の難しさ
- 患者と自分のかみ合っていない会話

どのように関係を構築していくかということが重要な課題となる。この学生-患者・家族関係から学生が学ぶことを重視し、昨年度より、自らの看護場面の再構成を実習に取り入れている。

本稿では、ターミナルケア実習において、学生が看護場面の再構成によってどのような学びをしているかを分析し、実習方法の有効性を検討したので報告する。

II. 「看護場面の再構成」の実習への活用

ターミナルケア実習開始時に、学生には「看護場面の再構成」を行う目的を説明し、記録用紙 (図1) を配布した。記録用紙は、まず場面の背景を記述し、その場면을時間の流れに沿って「自分の知覚したこと」「自分の思ったこと、考えたこと、感じたこと」「自分の言ったこと、行ったこと」「考察」の4つに分けて記述するように設定されている。学生は実習中、患者あるいは家族との関わりの場面で、気になった場面や振り返りたい場面の中から最低でも1場面を取り上げ、再構成の様式に則って記録を行い、自己の関わりを振り返りを行った。

また、その記録を基にして、実習中にカンファレンスを行った。カンファレンスの場では、各学生が再構成に取り上げた自分と患者あるいは家族の関わりの場面を紹介しあい、自分が感じたこと、迷ったこと、困ったことなどについて話し合い、自己の看護の振り返りや場面の深い考察を試みた。

【看護場面の再構成】

月 日 曜日 患者氏名 No. 氏名

場面の背景

自分の知覚したこと (自分の見たこと, 聞いたこと)	自分の思ったこと, 考えたこと, 感じたこと	自分の言ったこと, 行ったこと	考 察

図1 「看護場面の再構成」の実習記録用紙

Ⅲ. 方法

平成12年度ターミナルケア実習を履修した学生12名のうち、文書により承諾の得られた学生12名を対象として、分析に必要なデータを収集した。データは、①看護場面の再構成として記述されたもの、②看護場面の再構成のカンファレンスで話し合われた内容、③看護場面の再構成の学びに関するアンケート（実習終了時）、④看護場面の再構成の学びについて担当教員4名で話し合った内容（実習終了後）であった。得られたデータはそれぞれに質的に分析を行った。

Ⅳ. 「看護場面の再構成」による学生の学び

1. 学生が取り上げた場面と受け持ち患者の概要

今回取り上げられた場面数は全部で36場面であり、1人の学生が取り上げた場面の数は1～5場面にわたっていた。その中で、患者との関わりの場面を取り上げたものは29場面、家族との場面を取り上げたものは6場面、家族とナースの関わりをその場で観察した場面が1場面あった。

学生が受け持っていた患者の概要は表3の通りである。

全員の学生がターミナルステージにあるがん患者を受け持っており、うち2名が実習中に亡くなった。受け持ち患者の病状により、コミュニケーションをとることが困難、またはほぼ不可能だったのは3名であった。

学生が取り上げた場面のテーマとしては、表4にあげたような14のテーマに分類され、その多くは、患者の心理的側面に深く入ることができなかった場面、患者と死や病状の悪化に関する問題を共有することにとまどった場面、患者の言動の意味がよくわからず今でも気になっている場面であった。

2. カンファレンスの内容

「看護場面の再構成」の実習記録をもとにして行われたカンファレンスの中で話し合われた内容として、以下の7つのテーマが抽出された。

患者とのコミュニケーションに関することでは、自分が見たり聞いたりした患者の行動や言葉がその場では何を意味しているのかよくわからず、自分の対応もそれによかったのか疑問に思っている場面を通して、それが何を意味していたのか、その時どう対応したらよかったのかを他のメンバーと考える【患者の言葉や行動の意味とその対応のあり方】、患者の気持ちを聞こうとするが相

手から思うような答えが得られない、あるいは患者の深い部分に入り込むことに自分に迷いが生じたような場面を通して、どのように患者の気持ちを聞いていったらいいのかという【患者の思いを引き出すこと】、一方、今の病状に対する不安を打ち明けられた場面において、その時どう対応したらよかったのかという【患者のつらさを受け止めること】がテーマとしてあげられていた。その他、ターミナルケアの特徴的なテーマとして、患者との会話の中で「死」という言葉が出てきてとまどった場面を通して、【患者と「死」について話すこと】が語られ、自分の死生観や死を前にした人の気持ちに傾聴・共感することの難しさについて話し合われた。そして、患者の病状に関して自分の知っている現実と患者の認識にずれがあると感じた時など、自分が知っている患者の病状の変化や先の見通しなどの患者にとってつらい情報を、患者にどのように伝えたらいいかという、【患者に悪いニュースをどのように伝えていくか】ということが話し合われていた。また、意識レベルの低下した患者やせん妄、抑うつ状態にある患者といった【コミュニケーションが難しい状態にある患者との関わり方】についても学生間で共有されていた。

一方、家族に関しては、家族と患者の関係性に自分はどこまで入っていいのか、あるいは家族にどのような援助が必要だったのかなど【家族への援助のあり方】についても話し合われていた。

3. 学生のアンケート

1) 「看護場面の再構成」を書くことを通して、気づいたことや学んだこと

書くことを通して学んだこととしては、【取り上げた場面のコミュニケーションの分析と次への課題の明確化】に関することが一番多くあげられていた。具体的には、「なんとなくうまくいかなかったと思い、すぐに再構成をしようと思ったが、書いて文字化する中で、なぜうまくいかなかったと感じたかをゆっくりと考えることができ、ゆっくり考えることで『こういえばよかった』という思いが出てきた」「書く前にその場面を選ぶということは、そこに気になる要素があったということだが、それを細かく記していくことで、そのときの感情なども明らかになり、その状況がわかりやすくなった」というような、その場面でのコミュニケーションについて《自分がうまくいかなかったと感じた理由の明確化》を促すきっかけを与えていた。そして、「会話がどのように進んでいったのか、患者と自分がどのように反応し、お互いにどのように影響しあっているか、患者と関わっている時、自分がどのように思考し、なぜそのような行動(会話)をとったのか……が明らかになった。そのこと

で、自分の会話の問題点が見えてきた」「自分のケアを振り返ることで、もっとこうすればよかった、なぜ相手がこのような反応をしたのだろうかなどと考え直すことができた」というように、その1場面の対話の中で生じている《相手の反応の意味することの考察》と《自分の反応の意味することの考察》、そして互いの反応がどのように影響しあっているかといった《患者と自分の相互作用の客観的な分析》を行い、それをもとにして自分はその場面でどう対応すればよかったかなどを考える《自分の対応の評価》につながっていた。また、「何となく覚えているつもりのお話を一度文字にすることで、記憶に残りやすく、文字を見ながら振り返ることができた。その会話の印象が強くなることで、その会話の反省や内容を患者様との次の会話の時に意識することができた」というように、自分がコミュニケーションの中で評価したことを《次の会話での意識づけ》に生かすことができていた。

また、1つの場面を通して「自分のケアや言動にありがちなパターンを知ることができた」といった【自分のコミュニケーションの傾向や問題点への気づき】や、日を追って再構成を書くことによって患者との関係性の変化を振り返り、【対象との関係性における自己の成長の実感】につながり、自分自身を見つめ直す機会となっていた。その他、「自分の何気ないと思いがちな一言が、相手にとって時には大きな影響を与えることを改めてわかった」というような【コミュニケーションの難しさや重要性を再考】し、患者をより身近な存在として感じられる【患者への親密性の高まり】、時間をおくこと、文章化することによって得られる【考えの深まり、広がり】、「頭に混沌としていたものが整理され、気分的にもすっきりした」といった【気持ちの整理】を体験していた学生もいた。

2) カンファレンスの場で自分の「看護場面の再構成」について話し合うことを通して気づいたこと、学んだこと

カンファレンスの場で、自分の「看護場面の再構成」を発表したり、それに対して他のメンバーからの意見をもらうことを通しては、【自分に対する保証や自信を得る】ことや【新たな視点・客観的な見方を得る】ことができたことと評価する学生の感想が多く見られた。「自分が考えていたこと(考察)が、それでよかったのだと思ったり、皆に意見をもらうことで、そう考えることもできるのか、とハッとさせられることもある」というような他のメンバーからのフィードバックによって、自分の対応に対する迷いや不安を解消する場として役立っていた状況がうかがわれた。さらに、書くことを通して学んだことと同様に、【自分のコミュニケーションの傾向や問

題点の明確化】【コミュニケーションの反省と次への課題の設定】といった自分のコミュニケーションを客観的に振り返る機会となっており、また、少数ではあったが、「自分では会話の状況や背景がわかりやすいような気がしているが、会話の状況や患者の様子の説明をしなければ自分がその会話から感じたことがうまく伝わらないように感じた」というような【場面を人に伝えることの難しさ】を述べていた学生もいた。

3) カンファレンスの場で他のグループメンバーの「看護場面の再構成」について話し合うことを通して気づいたことや学んだこと

他のグループメンバーの「看護場面の再構成」について聞いたり、話し合ったりする体験を通して学んだこととしては、【他の人の体験を自分だったらどうしたかという視点で考える】ことができたという感想が多かった。「他のグループメンバーの看護場面を、自分だったらこの時どうしただろうと自分に置き換えて考えることができる」「実際には体験していない場面であるけれども、他のメンバーが経験しているため、状況をイメージしやすく、自分だったらどう捉えるだろうと考えることができた」という言葉で表されているように、他のメンバーの体験を共有することを通して、いろいろなコミュニケーションのあり方について考える機会となっていた。

また、「患者さんの会話から見たことのない患者さんをイメージし、どんな悩みをもったり、背景があったり、どんな状況にある人なのかを考えることができた」というような、実際には担当していないそれぞれのメンバーが受け持っている【他の患者の状況を理解する】ことや、「他のメンバーのやりとりのよいところや、自分と違った感じ方、考え方を知ることができたので、新たな感じ方や考え方を知ることができてとても新鮮だった」「自分だけでなく他の友達も同じようなことを悩んでいるかと思った」というような、それぞれの場面を通して【他のメンバーのおかれた状況や新たな一面・看護観を知る】ことを通して、それぞれの患者の特徴あるいは他の学生の体験についての理解を深める機会となっていた。また、そのような他の患者・他のメンバーとの違いを理解することは、「自分の患者さんと他の学生の患者さんの反応の違いなどを比べることで、自分の患者さんの理解が深まった」といった【受け持ち患者への理解の深まり】、「他の人の長所に気づくことで、自分はどうかを見つめることができた」「とてもよいコミュニケーションができていて人のケースを見ることで、自分と異なるところを見つけたり、こうすればよいのだと思った」というような【他のメンバーの体験を通して自分を知る】ことにもつながっていた。

その他、ターミナルケアにおけるコミュニケーション

の大切さ、コミュニケーション能力に問題がある患者との関わり、看護学生としての振る舞いなどの難しさなどの【コミュニケーションの重要性・難しさ】や、【家族のケア】【他の看護者との考え・体験を交換・共有することの重要性】について述べているものが見られた。

4) その他

その他の意見としては、「場面を振り返ることが患者や家族の理解につながっていく、というのが一番の収穫なのではないかと思った」「どうすべきであったかはっきり答えが出なくても、再構成を行わなければ気がかかただけで終わってしまったかもしれない場面を振り返ることができてとてもよい学びになると思う」というような【再構成をやることの意義】について述べられていた。また、コミュニケーションの難しさの実感を語ったもの、あるいは他の実習でもやってほしい、思ったほど大変ではなかった、教員からのアドバイスが参考になったというような感想も見られた。

3. 教員による評価

「看護場面の再構成」を用いたことが実習目標の達成状況に対してどのような影響があったかを実習担当教員で話し合ったところ、「看護場面の再構成」は【患者・家族の理解の深まり】【学生-患者・家族関係の中で提供される看護の明確化】【自分自身をより深く知る機会】【自己の看護観・死生観の形成】に役立っていたと考えられた。そして、【患者・家族の理解の深まり】は、実習の具体的目標1と2の死に直面した人のトータルペインを理解することや家族の悲嘆を理解することにつながり、【学生-患者・家族関係の中で提供される看護の明確化】は、これまで意識していなかった相互作用を通じた看護の提供について学ぶことで、具体的目標3である苦痛や悲しみの中にある患者・家族へのケアを実践することに役立っていた。また、学生が自分と他者との関係を振り返ることではっと気づく体験をし、自分が看護を実践する上で乗り越えなければならない壁を意識化できたことによって【自分自身をより深く知る機会】となり、それを他の学生と共有し、自己と他者の共通点や相違点に気づき、具体的目標5の【自己の看護観・死生観の形成】に役立っていた。

さらに、「看護場面の再構成」を【記述することの意義】について、記録を書くことを通して、他者から促されることができ、それによって、学生は自分が相手に対して与えていた影響や患者・家族との関係性の洞察につながり、その洞察を次のケアに生かすことができ、学生によっては最終的にはそのケアの評価までも再構成によって評価することができていた状況が見出された。これは総合

実習の共通目標でもある、対象と環境との相互作用を力動的に把握することや主体的に働きかける能力を養うことにつながっていたと評価された。

V. 「看護場面の再構成」を用いることの意義と今後の課題

「看護場面の再構成」とは、「看護婦が患者あるいは患者のケアに関連のある人とのかわりの中での体験を思いおこして再現するもの」¹⁾である。「看護場面の再構成」は、まず日々の臨床実践の中で生じる「つまずき体験」を拾い上げ、なぜその場面が気になるかを自分に問いかけてみることによって検討すべき問題をしぼることである。次いで、その場面が信頼できる第三者の目にどう映るかを伝えてもらうことによって、自己の限界を知り視野を広げること、そして、他者の視点を組み込んだ自己評価によって自己への信頼を取り戻すことというステップをたどっていく。それによって、危機的な状況を克服して看護専門職としてのアイデンティティの確立につながることを期待されている²⁾。

現代の社会では、日常生活の中で、死にゆく人あるいは死そのものを身近に感じることは少ない。講義や演習での学びの中で死や死にゆく人々について理解をすすめたとしても、死に直面し、苦悩する患者を前にした時、学生は、はじめて死が現実のものとして感じられるため、さまざまな「つまずき体験」にぶつかることも多い。学生が上げた場面の多くは、患者の心理的側面に深く入ることができなかった場面、患者と死や病状の悪化に関する問題を共有することにとまどった場面、患者の言動の意味がよくわからず今でも気になっている場面などがあげられていた。このような場面の再構成を行うことを通して、学生は、患者・家族といった対象の理解が深まった、またそれをふまえて自分の対応を客観的に評価できたというような感想をもっていた。そして、カンファレンスのテーマとして【患者の思いを引き出すこと】【患者のつらさを受け止めること】あるいは【患者に悪いニュースをどのように伝えていくか】といった学生が共通して困難を感じているコミュニケーションにおける問題がテーマとしてあげられ、ターミナルケアのあり方を深めるきっかけとなっていた。ターミナルケア実習の目標にあげられているように、ターミナル期にある患者の苦痛を全人的視点でとらえること、その家族の悲嘆を理解し、QOLの向上につなげていくことはターミナルケアにおいて重要な視点である。また、実際に死に向かう対象の個別性もさまざまで、実習においても看護者の看護観やコミュニケーション能力が問われるため、その場の状況を振り返って深く洞察し、自分だけでなく他者の

さまざまな視点を通して次の援助の課題を見出すことができたということは、再構成を行うことの有効性を示すものと考えられる。

また、再構成は「自分自身を見直すこと」にもつながっていた。その場面を分析する中で自分の心の動きを振り返ったり、コミュニケーションの傾向や問題点に気づいたりすることができ、日を追って再構成を書くことで、患者との関係性における自分の成長を実感していた。さらに、他のメンバーの体験を聞くことで、「自分だったらこうするだろう」というような他者との違いを発見し、自己の理解を深めたり、自分の抱える迷いを他のメンバーに伝え、意見を交わすプロセスを通して、援助における新たな視点や課題を見出すことができた。カンファレンスのテーマでは、【患者と「死」について話すこと】について検討され、再構成で取り上げた場面を題材に、学生は自分の死に対する考えに気づき、その死生観を他のメンバーと共有し、深めていくこともできていた。

患者との対人関係においては、看護者が自分自身を知ることが重要なプロセスである。特に、ターミナルケア実習では、実習目標の1つにも掲げられているように、学生は自己の死生観を確立していくことが必要とされる。また、学生は、患者との関わりの中で専門家としての自分の理想と本来の自分の感情の間で葛藤を抱えることも多いと思われる。若狭³⁾は、ターミナルケアに携わる看護婦が安定した心の状態を保つためには、看護婦自身が自分の心の状態に気づき、患者との関わりの中で体験する感情を十分カタルシス(浄化)することが必要であると述べている。再構成は、学生の自己理解やデスエデュケーションを高めるとともに、ケアの中で生じるさまざまな自分の葛藤に対して、その感情を大切にしながら次の患者ケアに活かしていくための1つのコーピングとなったのではないかと考えられた。

また、カンファレンスで再構成の学びを共有することは、「チームアプローチの体験」にもつながると考えられる。宮本⁴⁾は、再構成におけるグループ指導の利点として、学生間で課題が共有しやすいため、他の学生の体験からも多くのことが学べることや他のメンバーから共感と理解によって支えられ、グループへの信頼感を高めることなどをあげている。実習の具体的目標には、チームアプローチを理解し、チームの一員として主体的に援助を行うことを掲げている。アンケートの中で、【他の看護者との考え・体験を交換・共有することの重要性】を感じていた学生もいたように、再構成を題材にしたカンファレンスは、それぞれの学生が共通して悩んでいるテーマについて話し合うきっかけを作ると同時に、さまざまな立場から患者・家族の状況を理解し、チームで援助していくことの重要性を認識することにつながってい

たと思われる。

さらに、今回半数の学生が、自分の再構成を他の学生と話し合うことを通して保証や自信が得られたというように、他のメンバーからのサポートを受けたという実感をもっており、それと同時に他の学生の体験を聞くことでそのメンバーの個性や看護観への理解を深めるきっかけとなっていた。これは、実習グループのグループダイナミックスを高め、互いにサポートしあえる関係性を築く上で役立っていたと考えられる。

しかし、再構成のやりとりを他者に話すということは、時に他のメンバーから自分の認めたくない一面を指摘されたり、批判されたりという体験につながるものが考えられる。発達段階としてアイデンティティ確立の途上にあり、仲間集団との関係性が自我に大きく影響する学生たちにとって、カンファレンスでの相互作用は自己を脅かす体験となる恐れがある。特に、ターミナルケア実習では「死」やそれに対する自分の感情などプライバシーに関わる内容が話し合われやすい場であることから、今後の課題として、教員は学生が感情を安心して吐露しやすいようなグループダイナミックスを配慮していくこと、またカンファレンスでの学生の様子を観察し、その後のサポート体制を整えていくことが求められるであろう。

VI. おわりに

ターミナルケア実習において「看護場面の再構成」を学習過程を促進する1つの手法として用いることは、気になった1場面を振り返って、その時の状況を洞察し、他者と共有しあうプロセスを通して、学生のターミナルケアにおける患者理解とよりよいケアのあり方について

の学びを深めるとともに、看護者としての自己の成長やグループダイナミックスの向上にもつながることが明らかになった。再構成法は、実習の場だけでなく、今後学生が臨床の場に出た後も、自己の看護者としてのあり方を振り返り、高めていくための方法として活用できるものであると期待される。実習指導の場での実践を重ね、「看護場面の再構成」を用いた実習記録やカンファレンスを通しての学生の学びや変化についての評価を継続して行いつつ、より有効な指導のあり方を考えていきたいと考える。

引用文献

- 1) Wiedenbach, E.: Meeting The Realities in Clinical Teaching, 都留伸子, 武山満智子, 池田明子訳: 臨床実習指導の本質—看護学生援助の技術, p.157, 現代社, 1972.
- 2) 宮本真巳: 感性を磨く技法1—看護場面の再構成, p.24—25, 日本看護協会出版会, 1995.
- 3) 若狭紅子: 看護婦の心のあり方, ターミナルケア, 9 (2), 102—105, 1999.
- 4) 前掲書2), 105—106.

参考文献

- 1) 上野 轟: 話の聴ける看護婦になるために, 医学書院, 1978.
- 2) 柏木哲夫, 藤腹明子編集: 系統看護学講座別巻10—ターミナルケア, 第2版, 医学書院, 1995.
- 3) 服部祥子: 生涯人間発達論—人間への深い理解と愛情を育むために, 医学書院, 2000.

Abstract

Learning through Reconstructing of Nursing Interaction on Clinical Practice for Terminal Care

Noriko Iba, R.N., M.N.¹⁾, Yoshiko Sakai, R.N., P.H.N., M.N.¹⁾,
Akiko Tonosaki, R.N., P.H.N., Ph.D.¹⁾, Keiko Ikeya, R.N., P.H.N.¹⁾,
Hiroko Komatsu, R.N., Ph.D.¹⁾

Clinical practice for terminal care is one of the comprehensive clinical practices in the fourth year in St. Luke's College of Nursing curriculum. The purpose of this research was to clarify nursing students' learning experiences through reconstructing of nursing interaction in the clinical practice for terminal care. Twelve students were admitted to the clinical practice for terminal care. The students' reconstructing of nursing interaction records, content of conference about their reconstructing of nursing interaction, the questionnaire for the students, and content of the teachers' assessment conference were collected and qualitatively analyzed.

The students selected thirty-six scenes, which were about nursing student – patient interaction (29 scenes), student – family interaction (6 scenes) and nurse – family interaction (1 scene). Each student selected from one to five scenes.

As a result, reconstructing of nursing interaction is useful as a learning method of the terminal care practice for the students 1) to understand patients and family deeply, 2) to realize how the students interact to the patients and family by themselves, and 3) to discuss with other group member about difficult situation particularly in terminal care. It seems that students learned the significance of terminal care and constructed the thoughts about death and life through reconstructing of their interactions, writing them, and discussing about the scenes, which were selected by them. However, reconstructing of nursing interaction may threaten students' identities, so that it is important to recognize its effect of group dynamics to students, and build trustful relationships among teachers and students while offering emotional support to students.

Key words

terminal care, clinical practice, reconstructing of nursing interaction, nursing student, patient-nurse interaction

1) St. Luke's College of Nursing, Adult Nursing